

動物愛護センターにおける公開講座等の開催による普及啓発と資料の活用について

長野県動物愛護センター ○橋井真実 岡野美鈴 小林雅巳 藤森令司
宮入美帆 浦野絵梨 小平 満 松澤淑美

1 はじめに

長野県動物愛護センター（以下、「センター」という。）は平成12年（西暦2000年）に「動物の愛護及び管理に関する法律」（以下、「動物愛護管理法」という。）に基づき、人と動物が共生する潤い豊かな地域社会を構築することを目的に、動物愛護意識の高揚と動物の適正な飼養管理の普及啓発を図るため、動物愛護に関する事業を総合的に行う拠点として設置された。また、平成20年3月に策定された「長野県動物愛護管理推進計画」を推進するための基幹的な拠点施設としても位置付けられている。

事業としても、「動物愛護・適正飼養の普及啓発」を大きな柱として位置づけ、様々な取り組みを行ってきたところだが、令和元年から流行が始まった新型コロナウイルス感染症（以下、「コロナ」という。）の感染防止対策により、動物愛護フェスティバルや公開講座等の普及啓発事業や保健所等における講習会、飼い方教室等が中止されるなど、事業が大幅に制限され、センターだけでなく県内の保健所においても十分な普及啓発ができない状況となった。

令和4年度に入り、コロナ対策が徐々に緩和されたことを受け、センターでは幅広い県民を対象とした公開講座等を充実させることにより、普及啓発事業の推進を図った。また、県内中学校等からの「キャリア学習」への講師依頼や長野県政出前講座（以下、「出前講座」という。）等が再開されたことを受け、積極的に普及啓発を行うこととした。併せて、これら事業において作成した普及啓発資料を県内保健所等で活用できるよう、共有する体制を整えたので報告する。

2 公開講座等の開催状況

(1) 主な公開講座等の概要

公開講座、出前講座等、研修会形式で行った主な内容は表1のとおりであった。

表1 主な公開講座等

イベント、講演名等	内容等	開催日	講師	対象者	参加者数	
ハローアニマルサマースクール	体験を通じて、動物の習性や扱い方及び命の尊さを学ぶ	7/30(土) 7/31(日)	センター職員	小学生と保護者	4組11名 4組9名 計8組20名	
公開講座	うさぎの飼い方教室	うさぎの特徴や飼い方について楽しく学ぶ	7/30(土)	センター職員	小学生と保護者	4組9名 他職場体験4名
	モルモットの飼い方教室	モルモットの特徴や飼い方について楽しく学ぶ	8/20(土)	センター職員	小学生と保護者	3組9名 他職場体験等4名
	「どうぶつあいごセンター」や「ほけんじょ」のおしごとについて	センターや保健所の仕事について学ぶ	8/6(土)	センター職員	小中学生と保護者	6組10名
	キッズチャレンジ「犬のトレーニング」	犬の習性を学び、トレーニングを体験し、動物を飼育する責任や命の大切さを学ぶ	8/7(日)	センター職員	小学生と保護者	6組17名
	どうぶつをかうためのじゅんぴのおはなし	「命」について考え、動物のお世話のポイントや動物とのふれあい方を学ぶ	8/11 (木祝)	センター職員	小中学生と保護者	4組14名

	「地域猫活動」のはじめの一步	「地域猫活動」考案者による基本的な考え方や進め方について	11/23(水)	(公財)神奈川県動物愛護協会黒澤泰先生	動物愛護推進員、一般	対面 21名 オンライン 42名 サテライト会場 31名
出前講座	中学生キャリア学習(3校)	センターや獣医師、動物関係の仕事について		センター職員	中学生等	30名 20名(保護者含) 30名(小学生、教師含)
	高等学校	センターや保健所の仕事、命の大切さ等		センター職員	高校生等	30名(体験入学の中学生、保護者、教師含)
	人と猫が快適に暮らすために	「千曲ねこの会」主催。地域猫活動や適正飼養について	2/12(日)	県食品・生活衛生課職員、センター職員	一般(住民、千曲市、ボランティア等)	38名
	動物を介在した子どもたちへの支援	ハローアニマル子どもサポート、動物が人を癒すメカニズム等	1/28(土)	センター職員	子どものための電話ボランティア	24名

(2) これまでと異なる点や工夫した点等

ア 夏休み中には、例年小中学生向けに実施している「ハローアニマルサマースクール」を新型コロナ対策として縮小して実施するとともに、公開講座を充実させた。会場として、主にセンターの「どうぶつ探Q館」を利用し、バリアフリーの広々とした空間で居心地よく参加してもらえよう心がけた。(図1)

イ 広く一般を対象とした公開講座として、長野県動物愛護推進員研修会と兼ねた「地域猫活動」に関する研修会を外部講師を招いて開催した。開催方法として、コロナ禍において整備を行ったオンライン環境を活用し、さらにネット環境がない参加者のために各保健所においてサテライト会場を設け、対面方式と併用して実施した。(図2)

ウ コロナ禍において中止が続いていた中学校等のキャリア学習については、まだ完全に再開できないとのことで、実際に職場体験を行う学校も増えつつあり中学校で4校のべ5回、高等学校で2校のべ3回あったが、座学のみで開催方法を選択する学校も多く、数校の依頼があった。内容として、獣医師や動物に関する仕事とあわせて、動物愛護管理行政の現状等についても盛り込んだ。

エ センター職員による体験の多くでは、命の大切さを知ってもらうために、動物のふれあいや心音モニターまたは聴診器を使って心音を聴いてもらうなど、センターならではの内容を盛り込んだ。

オ 当所職員が講師となりパワーポイント(以下、「PPT」という。)等の資料を作成する際、イラストや写真等の著作権や肖像権を侵害することのないよう、過去に作成した資料を引用する際も出典が不明な資料や撮影者が不明な写真は使用しないこととし、担当が変わっても継続して使用できるよう配



図1 探Q館におけるモルモットの飼い方教室の様子



図2 オンライン環境を活用した公開講座の様子

慮した。(図3)

作成したPPTについて、センターだけでなく保健所等でも活用できるよう、全庁サーバ(¥¥svky.vdi.pref.nagano.lg.jp) ¥全庁共有 ¥現地機関(合庁以外) ¥30_動物愛護センター ¥★公開講座等資料(HC使用可)に保存した。



図3 県政出前講座におけるPPTの一例
(センターで撮影した写真等を利用)

3 アンケート結果による感想や意見等と考察

(1) サマースクール及び夏休み中の公開講座

「動物にふれあえたこと」や「センターのバックヤードを見学できたこと」がよかったというイベントそのものに関する声が多かったが、「動物を飼うことが大変だとわかった」「将来動物を飼うときはちゃんと勉強してから飼いたい」など、命の大切さを感じて深く考えた感想も多かった。

また、保護者からの回答では「命の大切さを知ることができた」「動物のお世話について理解が進んだ」「動物を飼うか迷っていたので参考になった」など、子どもに命の大切さを理解してほしいと考えている様子が伝わった。

ほかに、「保健所=殺処分のイメージが変わった」「思ったより殺処分が少ないと思った」「自由研究の参考になった」など、動物愛護に興味を持って参加したと思われる感想も多かった。

サマースクールは以前より時間を短くしたが、小学生やその兄弟の未就学児が多かったため、時間は「ちょうどよかった」という意見がほとんどで、「また参加したい」という声が大半を占めた。

なお、例年「動物愛護に関する自由研究」のために個別に来館する親子連れが多く、それぞれに1時間程度説明を行うことが多いが、今年度はほとんどなく、サマースクールや公開講座の充実によるものと推察された。

(2) 中学校、高等学校における出前講座

特に中学生は、対面では発言が少ないが、授業の一環ということで後日感想が届き、よく話を聞いている様子が伝わった。将来の職業選択の参考にする目的もあるため、職業に関する感想も多かった。

キャリア学習では10~20種の職業から興味のある分野を選択して受講する形で、「動物に関する職業につきたい」というより「動物が好き」「動物愛護に興味がある」という生徒が多い印象だった。

感想でも、「獣医師の仕事が動物病院だけでなく幅広いことがわかった」「動物に関する仕事がたくさんあることがわかった」などの声とともに、「殺処分が減っていることがわかった」「殺処分をしているのも本来動物が好きで獣医師でつらいと思った」「苦しまないように安楽死させていることがわかった」などのコメントがあった。

(3) 地域猫活動に関する講座

ア「地域猫活動」のはじめの一歩

アンケートでは、講演内容が「大変参考になった」「参考になった」が約9割を占め、地域猫活動に期待することとして、「猫によるトラブルがなくなる」「地域住民の関係がよくなる」「猫の命が守られる」との意見が多かった。

ただし、地域猫活動を進める課題として「資金がない(足りない)」「地域の理解がない」「人員が不足している」などがあげられた。

また、必要な支援として「手術費用の補助」「地域猫活動説明会での講師」など、行政への関わりを求める意見が目立ったほか、「相談できる動物病院」や「捕獲の手伝い」などの意見も多かった。

イ「人と猫が快適に暮らすために」

会場では、行政からの講演の後、「地区の猫による被害で困っている」という方から、行政の「地域に対する細やかな対応には法的にも限界がある」とする姿勢に対して強い意見があった。しかし、その後の事例報告等を受けて、地域で取り組むことについて少し興味を持つ様子へとやや変化が見られた。

市役所の担当課からも「地域猫活動や普及啓発の成果によって、苦情が減少してきた。今後も補助事業も含め連携しながら継続していきたい」との発言があった。

主催者からのアンケートでも、「地域みんなで取り組むことが大切だと感じた」「住民の話し合いをしっかりとしようと思った」など、地域で住民が取り組むことへの理解が進んでいる様子がみられた。ただ、「猫の飼い方が変化していることに複雑な思いを抱えている」、「飼い主の問題であり地域やボランティアが担うものではない」「自分の地域ではできない」などの意見のほか、「ホームページは見ないので、定期的にチラシを配布してほしい」など継続的な普及啓発事業の重要性を訴える意見もあった。

また、主催者の挨拶において、「11月にセンターで開催された黒澤先生の『地域猫活動』のお話をオンラインで視聴して、地域でも普及啓発のイベントを開催しようと思った」という発言があり、普及啓発事業が関連して広がっていくことを実感した。

(4) 動物介在活動に関する出前講座

会場における意見交換やアンケートにおいて、「子どもに寄り添ううえで非常に興味深く参考になった」「支援者のマッチングなどでも連携したい」「県政出前講座を知らなかったので、今後活用したい」などの意見があった。

4 まとめ

センター開設から約23年経過し、その間動物愛護管理をとりまく状況は大きく変化した。保健所に収容される動物の多くは、「犬」から「猫」へ変化し、「殺処分ゼロ」や「動物福祉」というキーワードが報道やインターネットでも大きく取り上げられるようになった。動物の適正飼養も犬猫とも室内飼養が常識となった。動物愛護管理に関する考え方も多様化し、近隣住民だけでなく県外からも意見が寄せられることも多い。

結果として、個別対応や動物の飼養管理に追われることが多いが、行政の役割として広く普及啓発していくことは大きな役割である。ただ、目の前の事例が即時に改善されることにはならず、また企画や調整、資料作成など手間も多いため、特に経験の浅い職員にとっては負担感も大きい。

センターは、「普及啓発」を大きな柱としているものの、診察室や動物ふれあい、動物介在活動、施設の管理等幅広い業務があり、またコロナ禍となったことで職員が県民に普及啓発する機会や保健所との会議等を通じた関わりの機会も減ってしまった。

その中で、普及啓発事業を見直して実施したことにより、職員全員が企画立案、資料作成等を経験した意義は大きいと考える。併せて、作成した資料を県内保健所で活用できるようにしたことで、保健所の動物愛護管理担当職員の負担軽減や普及啓発のきっかけになれば幸いである。

今後もセンターでは普及啓発事業のあり方を継続的に検討し、さらに効果的な事業推進に努めていきたい。